

キュートな恋  
のお話  
短編集

キミイ



## 目次

恋は突然

恋の予感

欲しいのは君のチョコ

選択 **new story**

小悪魔なハニー **new story**

恋は突然

一度も恋をした事のない女子高生のお話

恋とか愛とかどこにあるの？

それは突然、予定外の方向から降ってくるものです(\*^o^\*)

キュートな女の子の恋のお話です！

気軽に読んで下さい◎



ポリポリ...

じゃがりこ好き。

ペラ...ペラ...

いや〜ん！

この告白、きゅんきゅんしちゃう！

私...有木 渚 17歳。

彼氏いない歴 17年...

今日も学校終わってお金ないから真っ直ぐ家に帰ってきて、少女漫画で擬似恋愛中。

はあ〜こんなイケメンとラブラブな恋してみたいなあ〜

しかし、現実イケメンなんてフリーはいないし、彼女みんな可愛いし、私なんか眼中にないわけよ。

てかまず、現実ドキドキする人なんかいないし。

女子高だから出会いがないんだな。

合コンとか誘われるキャラでもないし。

毎日毎日なんの変化もない日々。

どこにでもいる平凡な女子高生だ。

そうだ！ 出会いを作ろう！

え〜っと、漫画とかの出会いは公園とか通学とか？

公園ってこの辺小さい公園しかないし、通学は自転車じゃん。

はあ…無理っぽいわ。

ああ、恋したい。

神様、私の恋はいつやってくるのでしょうか？

夏だね。

気がつけば、高校生になって二回目の夏だよ。

金なし。

彼氏なし。

変化なし。

暑い...エアコン付けて、漫画でも読むか。

ピロピロ...

おっと、メール。

あっ中学の時の友達の沙亜弥からだ。

特別親しいって程でもなかったし、何用？

『久しぶり！今ちょっと出て来ない？』

『なんで？』

『話ある。』

『メールでいいじゃん。』

『無理。』

仕方無い...

『何処行けばいいの？』

『駅前のミスド。』

『了解。30分くらい待ってて。』

私は少々支度をして、沙亜弥の待つミスドに向かった。

暑い中自転車漕いだから、もう汗だく...

沙亜弥は涼しい顔してジュース飲んだ。

「久しぶり」

沙亜弥とは去年の地元の夏祭りで会った以来だ。

なんか凄く女らしくなってるし。

「お待たせ。ってか喉乾いたから、ドリンク買ってくる」

オレンジジュース買って、沙亜弥の前に座った。

「で、突然どした？」

沙亜弥はクスッと笑って、分かりきった顔して聞いた。

「彼氏いないでしょ」

「はあ？」

いきなり失礼過ぎるでしょ!!

「彼氏欲しい？」

私の答えも待たずにそう聞いてきた。



「べっ別にめんどいし。いらない」

思い切り強がってしまった。

あ、いないのバレてるし。

「そうなんだ。いや、渚って中学でも浮いた話ひとつないし。  
女子高だし、相変わらずかなって思ってたんだけどね。  
いらないならいいや」

なんだか勿体ぶった言い方で感じ悪っ！

「いらない」

悔しいから、そう言ってしまった。

でも気になる...

「何？紹介？」

一応、聞いてみた。

「違う、バイト。  
カフェでね。あっ普通のカフェなんだけど...

大学の傍で結構イケメン来るよ。

私はもう彼氏出来たし、彼がそのバイト嫌がるから辞めるんだ。

で、代わりに渚にやらしてもらおうかと思ったんだけど、別な人に聞くよ」

「やる」

私、即答。

頭で考える前に答えてた。

イケメンにも出会えてお金貰えるならやるしかないでしょ。

早速、紹介してもらって、今日はバイト初日。

若干メイド風な制服は気に入らないけど、確かに大学生がいっぱい来る。

あっちもこっちもイケメンだらけだし。

このバイト、オイシイわ！

「おい、有木！ヨダレ垂らしてないで仕事しろっ！」

同じバイトの和泉君に注意されてしまった。

和泉君は確か同じ年って言ってたけど、バイト歴は長いらしい。

ってかヨダレ垂らしてないし。

ムカつく！コイツ！

イケメンゲットしたら辞めてやる。

バイト初日はなんとか終わった。

はあ...お金稼ぐって結構大変かも。

「お疲れ」

ん？頭の上にペットボトル...

和泉君が私の頭にペットボトル乗せてる...

「初日、お疲れさん。これやるよ。頑張ったご褒美だ」

「ありがと...」

私は頭上のペットボトルを受け取った。

和泉君はそのまま、裏口から出て行った。

結構、いいヤツ？

とか思った。

バイト三日目、かなりの大人数の団体が来た。

みんなして、あれやこれや注文する。

ここのカフェは今時伝票が手書きだ。

なんだか書ききれないであたふたしてきた。

「有木、あっちの客接客して。ここは俺やるから」

和泉君が助け舟を出してくれた。

「うん。お願いします」

接客を交代して、スムーズに客をこなせた。

ようやく一段落してホッとした。

「有木、ちょっと」

「何？」

「伝票、こうやって書くんだよ」

そう言って、和泉君の書いた伝票見せられた。

「分かる？いちいち、アイスコーヒーとか書いてたら手間掛かるだろ。

！.Cって書けば早いだろ」

なるほど...

「これからレジも覚えてもらおうし、覚えておけよ」

「はい...」

やっぱり、この人苦手...

もう少し、優しく教えてくれない？

帰りにたまたま、和泉君と同時に店を出た。

「お疲れ」

「お疲れ様でした」

挨拶して歩き出す。

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

「あの、何で付いて来るんですか？」

「俺んちこっちだから」

「...そう...ですか」

ああ、やな感じ...

「有木、バイトは長期？」

和泉君が話しかけてきた。

「一応...」

イケメンゲットしたら、さっさと辞める気です。なんて言えない。

「そっか、良かった」

和泉君は嬉しそうな顔をした。

えっ...なんで？

「結構、女の子入れ替わり激しくてさ。教えんのめんどくせえ」

なるほど、そういう事か...

「有木は頑張れよ」

肩をポンと叩かれ、十字路を右に曲がって和泉君は去って行った。



夏休みは週4日のバイトでどんどん過ぎていく。

バイトも随分慣れた。

しかしイケメンはこんなにいるのに沙亜弥みたいに誰にも声は掛けてもらえないし、私もドキドキするような人は現れなかった。

私はこのまま夏が終わる気がした。

ガシャーン！

奥のテーブル席からグラスが割れる音がした。

「テメ〜っ！ふざけんなよっ！」

うわっ、イケメン兄さん達の喧嘩！

女の人もあるから、修羅場ってやつか？

と見ていたら、和泉君がツカツカと修羅場の中に向かって行った。

「お客様、他のお客様のご迷惑になりますから、喧嘩なら外でお願いします」

深々と頭を下げ、喧嘩を止めた。

割れたガラスのせいでシーンとした店内に和泉君の言葉が響いた。

喧嘩していたお兄さん達と女の方は、ばつが悪くて外に出た。

私は直ぐにそのテーブルに行き、割れたガラスの片付けをした。

「...っつ！」

ガラスの破片で指を切ってしまった。

「馬鹿っ！気をつけろっ！」

和泉君はしゃがんで私の手を取り、切った指を覗き込み、私の指を吸った。

なっとなっ...

その手を掴んだまま、裏の流しに連れて行かれ、流しで口から破片を出し、私の指を洗った。

「いたっ...」

「我慢しろ」

キッチンペーパーで拭いて、薬箱を出し消毒して、バンドエイドを貼ってくれた。

物凄く手際が良くて啞然とした。

「大した事なくて、良かった」

和泉君が私を見て、微笑んだ。

その時だ。

胸がキュンと鳴った。

あれ？私今、和泉君にキュンってしちゃった？

嫌々、まさかだ。

和泉君はイケメンではない。

あれ？和泉君がカッコ良く見える。

和泉君ってよく見ると、目は優しげだし...

「残り片付けてくる」

和泉君が立ち上がり、ホールに向かって行った。

あれ、結構背高いし。

それからの私は妙に和泉君が気になってしまう。

気がつけば彼を目で追ってしまい、慌てて軌道修正する始末だ。

しかし、和泉君は仕事はそつなくこなし接客も上手く、爽やかな笑顔で女性客にもお目当てで来てる人が少なくない事に気づく。

ここホストクラブじゃないし。

あれ？今、なんか私ムツとした？

ああ、何なのさ！

変な私。

帰り際だった。

「有木、最近すっかり慣れて頑張ってるな」

私の頭をくしゃっと撫でて笑顔を見せてくれた和泉君。

私はドキドキしてしまう。

和泉君をチラッと見たら、和泉君も赤くなって慌てて、私の頭から手を離れた。

「帰るぞ」

今まで帰る時に声なんて掛けた事なかったのに。

「うん」

私達は一緒に店を出た。

「有木、腹減らね？」

「えっ空いてるよ。お昼から何にも食べてないもん」

「何か食ってくか？」

「えっ？私と？」

「嫌ならいいけど…」

「嫌じゃない」

「じゃ、決まり」

信じられない。

この私が男子と二人で食事するなんて。

近くのファミレスに入ったはいいけど、マジで緊張するし。

メニューもやっと、決めれた状態。

で...何話すわけ？

面と向かって何話すのさ。

目は？どこ見ればいいの？

「有木、マジで頑張ってくれてるから、俺、凄く楽になった」

突然、和泉君が話したからびっくりした。

「あの、あのもっと頑張ります？」

「ははは...有木、面白れえ」

笑われてしまった。

最悪...へこむわ。

「有木は真面目だな」

分かってるよ。

「つまらないやつでしょ」

「嫌、俺的には飽きないし。いいと思う」

私は頭からなんか噴射してるぐらい照れた。

「お待たせしました」

料理が運ばれ、会話は店の話しとかに変わった。



食事が終わり、会計になると、和泉君が頑張ったご褒美と言って奢ってくれた。

緊張して殆ど喋れなかった私。

別れ際、ようやく勇気を出して私から喋った。

「今日のご馳走様でした。それから、指もありがとうございました。それから、いつも助けてくれてありがとう」

一気に話した。

和泉君はキョトンとした顔をしてから、優しく笑ってくれた。

「どう致しまして」

和泉君がまた私の頭を撫でてくれた。

ドキッとしたけど物凄く嬉しくて、ずっと撫でていて欲しくなった。

私、和泉君の事好きなんだ。

その夜は眠れなかった。

和泉君の事ばかり考えて胸がきゅうきゅうした。



まあ、自分の気持ちに気づいたからってバイト中は何も変わらないんだけどね。

でもね、あんなにイケメンに見えた大学生達がチャラ男にしか見えないの。

和泉君はシャキッと仕事していて、一番カッコ良く見える。

うっかりすると見とれてしまうぐらい。

「有木、ボサっとするな」

「あ、は、はい」

相変わらず、工作中は厳しいけど...

結局、私は何も変化なく夏休みが終わろうとしていた。

バイトの帰り、トボトボと歩いていると、「有木！」と和泉君が呼び止めた。

振り返ると和泉君は私の前に既にいた。

「どうしたの？」

「バイト、辞めないよな？学校始まっても来るよな？」

「うん...」

和泉君が居るからやめる筈ないし。

確か前にも聞いたよな。

「良かった」

和泉君の無邪気な笑顔が可愛かったりする。

「あのさ、夏休みどこも行っていないって言ってたよな」

「うん」

「明日、俺達休みだろ。一緒に...」

「えっ？」

和泉君がいつもの和泉君じゃない。

「夏休み最後、デートしよう」

固まる。固まる私。

心臓止まっているんじゃない？

デートって何？

あのカップルがイチャイチャする、映画とかプールとか遊園地に行くやつですか？

完全にパニックな私。

「ダメかな？」

和泉君が私の顔を覗き込んだ。

顔が近くて、心臓が急に倍速で動き出した。

「ダメじゃない...ダメじゃないし」

なんかパニックって泣けてきた。

「えっ、わっ、何で泣いちゃうわけ!？」

「ごめんなさい。嬉しくて、つい、涙が...」

神様、私好きな人にデート誘われました。

和泉君が一步近づいて、私を抱え込んだ。

抱え？

え～っ何これ!?

これってば抱き締められてるってやつ？

あれ？このシチュエーション...漫画でもあったような...

「好きだ」

キター!!!

和泉君が、和泉君が好きって言った。

もう死んでもいいくらい嬉しい...

しかし完全に私のキャパを超えて、失神寸前。

「有木、何か言ってよ。俺、告ったの初めてだし」

「わ、私も初めてでどう、どうすれば...」

「好きって言えよ」

「す...すき...」

和泉君は更にぎゅうっと抱き締めた。

ああ、神様！

只今ラブ降りてきました！

...ってこの後どうすればいいの？

誰か恋の説明書、私に下さい！

完

恋の予感

人見知りな女の子のお話

休学中の男子が突然登校。  
人付き合いが苦手な私の隣の席にいきなりやってきた！

ちょっとだけドキドキをお届けいたします♪  
小さな小さな可愛い出逢いのショートラブストーリー◎



5分休み、私は読みかけの文庫本を取り出し読む。

教室はざわついているけど私は一人5分間だけ現実逃避。

私はストーリーの中の主人公になる。

走ったり飛んだり自由だ。

私は一番後ろの窓際だから、私を気にかける人は誰もいない。

誰もいない...誰もいない筈...

なんか隣の席からジットリと視線を感じるんですけど...

私は目だけ横にして、隣の席を見た。

．．．．え？

誰？

金髪に近い茶髪。チラッと見えるピアス。

だらしないYシャツにだらけたズボン。

ポケットに手を突っ込んだまま机に突っ伏して顔だけがこっちを向いている。

大きな瞳でジッと私を見ている。

「俺、高樹 綾よろしく」

彼は一度も姿勢を変えず、そのまま目を閉じた。

私はいきなり現れた隣の席の人物にうろたえるだけだった。

授業中、高樹君はずっと眠っていた。

昼休みになってようやく体を起こした。

私は自分の席でお弁当を食べようと弁当箱を出した。

「一人で食べるのか？」

突然、高樹君に聞かれた。

「うん...」

正直に答えると高樹君は私の腕を掴み、もう片方の手で私のお弁当を持った。

「えっ!?なに？」

「俺と食え。一人で飯を食うと美味しいもんもマズくなる」

そう一言、言い放ちズンズンと歩き出し、食堂まで連れて行った。



「ここ座ってろ」

食堂の空いている席に無理やり私を座らせ、目の前に私のお弁当を置いた。

高樹君は自分の昼食を注文し、私の目の前に座った。

「よし、食うぞ。頂きます！」

両手を合わせて、食べ出した。

見た目は怖いチャラ男風だけど、食べ方は上品だった。

「どうした？食べよ」

ぼうっと高樹君を見ていて食べるのを忘れていた。

私は慌ててお弁当箱を開き食べようとした。

「頂きますは？」

高樹君はどうやら作法にうるさいらしい。

「頂きます」

ちょっと怖かったから慌てて言って食べ始めた。

しかし、何で私が初めて会ったこんなチャライ男とお昼を食べるの？

疑問と不満な気分でお弁当を食べ終えた。

「ご馳走様でした」

文句言われたくないからちゃんと言った。

高樹君もご馳走を言って、お茶を取りに行った。

高樹君は私のお茶まで持ってきてくれた。

「あっありがとう」

お礼を言ったらニコッと笑った。

やばっ何気にイケメンスマイル。

「加奈子は友達いないのか？」

はい!?

今、加奈子って言いました？

「なんで私の名前...」

「ノートに書いてあったぞ。長瀬 加奈子って」

そうですか...

ってそうじゃないだろ!!

「初対面で友達でもないのに呼び捨てとかされたくないし」

「今日から俺が加奈子の友達だ。俺も久々学校来て友達いねえし。だから綾って呼べ。これで解決」

「・・・・・・・・」

呆気にとられ言葉が出なかった。

「教室戻るか...」

そう言って湯のみをサッサと片付け私の手首を掴んで歩こうとした。

私は反射的にその手を祓った。

「あまり触らないで。触られるの嫌いだから」

「じゃあ、手繋ごう」

はあ？

私の言ってる意味分かんないの？

とか思っていたうちに手を繋がれた。

私より大きくてあったかい。

人の温もりってこんな感じなんだ。

「触れ合うのもいいだろ」

ニコリと笑った綾の顔が優しく胸がキュッとなった。

私...人と接したり触れ合ったりが苦手だけど...

ちょっと強引だけど、綾ならもしかしたら私を変えてくれるかもしれない。

綾の後ろ姿を見つめながら教室に入った。

手が離れ、振り向いた綾の笑顔には優しさがあった。

私の心に柔らかい風が吹いた。

そよそよと吹く風に甘い恋の香りも乗せて...

完

2012.10.29作成

欲しいのは君のチョコ

---

欲しいのは君のチョコ

バレンタインデーのお話

キュートな学生のバレンタインストーリー



俺様...〇〇学園二年の白崎 遥。

自分で言うのもなんだが俺様めちゃモテ。

まあイケメンだし～面白いし～テニス部だし～

モテ要素は揃ってる。

今日はバレンタインデーだ。

去年貰ったチョコレート70個弱...

一人じゃ食えねえから家族で食べきったぜ。

ほら友達じゃマズいだろ？

今年はいくつ貰えるかな...

あ...俺さモテるけど彼女はいないのさ。

何故かって？

そりゃ...まあ...

うん、あれだ...

まあいいじゃないか！

朝、家出ると既に女子二人が待ち伏せ。

「私達友達だから抜け駆けしないって約束したんですぅ～」

紙袋一つずつ突き出す二人組。

荷物になるから一つにしてよ。

なんて事は言わず笑顔で頂く。

一度帰って玄関に放った。

げっ遅刻する！

俺は駅までダッシュした。

ホームで5個。

電車で3個。

駅から校門まで12個。

只今22個だ。

下駄箱開けたら雪崩のようにチョコレートが流出。

こっからは家に帰ってからカウントするか。

教室に入ると机の上にもあった。

今年はぜってえ去年より多いぜ。

どや顔で席に着く。

「そのチョコレート机の中から出て落ちてたから」

隣の水野 五月が、俺の机の上のチョコレート指差した。

「あ...ありがとう五月ちゃん」

五月はニコリともせず漫画を読んでいる。

五月...恥ずかしながら、これが俺の彼女を作らない原因だ。

五月はぜってえ笑わない。

てか俺を見る目は軽蔑に近い眼差しだ。

だけど...だけど...

五月は幼稚園の時の初めて好きになった女の子なんだ。

このクラスになってそりゃ久々の再会に度肝抜いたぜ。

だけど五月は俺の事なんか覚えてなかった。



隣に座ってるだけでこんなに胸が騒がしいのに、俺なんか眼中にないわ、記憶にないわでマジ切ない。

チョコレートなんてくれるワケねえよな...

勇気出してちょっと聞いてみるか！

「五月ちゃん...誰かにチョコあげた？」

五月は漫画から目を離しジロリと俺を見た。

「白崎君にはあげないけどちゃんと用意はしてあるわ。ご心配なく」

ピシャリと言われ撃沈した。

「へえ、誰にあげるの？聞いちゃダメか...」

「いいわよ、教えてあげる」

五月は漫画を机の中に仕舞い、体を俺に向けた。

「私がチョコレートをあげたい人はたった一人。

幼稚園の頃からずっと変わらない。

隣の桃組さんの男の子。

当時私字が読めなくて名前が分からなくてね...

卒アルは母が古本と間違えて捨てちゃうし...

正直顔も、もううる覚え。

だけど、彼ね一度だけジャングルジムで『五月ちゃん好き』って言ってくれたの。

私、嬉しくて...でも恥ずかしくて黙ってたら彼どっか行っちゃった。

でも私の気持ちは変わらない。

いつか会ったら...ちゃんと今も好きって伝えるわ。

彼は...きっと白崎君のように女の子の心を弄んで、チョコレートの数を競い合うような人じゃない」

一気に喋った五月は再び机から漫画を取り出し何食わぬ顔で読み出した。

今、俺はかなり動揺している。

ジャングルジムで告ったのは紛れもなくこの俺だからだ。

五月は少女漫画好きの夢みる少女だ。

幼稚園の告った相手が誠実な人になってると信じてる。

まさか俺みたいなヤツって気づいたらショックだろう。

俺は何にも言えなかった。

黙って机の上のチョコレートの山を眺めていた。

「白崎く～ん」

廊下からどっかの女子が呼んだ。

俺は立ち上がり、扉まで行く。

「私の気持ちです！受け取って下さい！」

ピンクのラッピングされた箱を差し出された。

「...ごめん...気持ちは嬉しいけど受け取れない。」

俺が欲しいチョコレートは一つだけだ。

そうだ！

チョコレート一つにも気持ちがあるんだ。

ならば欲しいのはたった一つ...

五月ちゃんのチョコだ！

俺が一番デカそうな紙袋をいくつかチョイスして貰ったチョコレートを詰め込んだ。

始業のベルが鳴った。

構いやしねえ。

ダッシュで貰ったチョコレートを返しに各教室を走り回った。

下駄箱に詰め込んであったのは宛名探して返しまくった。

そうだ、ホームで貰ったのは他校の子だ。

チョコにはご丁寧にメルアドある...

俺は連絡してその子の学校の校門まで行き返した。

何度も謝ったけど、彼女は泣いていた。

彼女の泣き顔はかなり胸にきた。

最初に貰わなければ彼女は泣かずに済んだかな？

いや、やっぱり泣いたか？

分かんねよ。

でも俺の欲しいチョコじゃない。

電車に乗って学校に戻ろうとした。

ふと玄関に放り投げたチョコを思い出した。

畜生！まだあんじゃねえか！

あっ俺んちの駅だ。

慌てて降りて家まで走った。

玄関開けると朝俺が放り投げたまんまの紙袋があった。

チョコも無事誰にも食われていない。

これで最後だ。

2つの紙袋を鷲掴みにし、玄関を出てまた走り出した。

学校に着くと丁度校門で下校チャイムが鳴った。

俺はそこで待ち伏せして今朝の二人組を見つけて返した。

終わった...

終わったけど...学校も終わってしまった。

俺はがっくりと肩を落としながらもカバンを取りに教室に向かった。

誰もいない筈の薄暗い教室。

そこには人影が見えた。

俺はゆっくり扉を開けた。

「...五月ちゃん？」

五月は一人窓際に立っていた。

「おかえりー。白崎君」

五月が初めて俺に向かって笑ってた。

教室に入り五月の前に立った。

「五月ちゃんっ！俺...」

「ストップ！今日はバレンタインデーよ」

五月はクスッと笑った。

「白崎君...あの時の返事...私も好きです」

五月は俺に白い箱に真っ赤なリボンでラッピングされたチョコレート差し出した。

「五月ちゃん...分かったのか？」

「バカね、好きな人の顔忘れるワケないでしょっ」

クスッと笑って俺の胸にチョコレート押し付けた。

「ありがとう。これが欲しかったチョコだ」

俺は今どんな顔してるかな？

相当にやけてる。

五月にはやられたと思ったけど...

「こら～何いちゃついでるっ！下校過ぎるぞっ。帰れ！」

いきなり見回りの先生に言われて、驚いた。

「は～い」

五月は愛想良く返事した。

「白崎君、帰ろ」

「あっああ…」

二人で教室を後にした。

階段までの長い廊下。

俺はそっと五月の手を握った。

五月は握り返してくれた。

俺のバレンタインデーは、滅茶苦茶疲れたバレンタインデーだったけど、滅茶苦茶ハッピーなバレンタインデーで幕を閉じた。

完

2013.2.14作成



## 選択

同じクラスの男の子との恋のお話

ラブラブだった彼氏に二股！！

あなたならどうする？

ティーンズの恋のちょっぴり切ない

恋の選択



私の彼、隆二は高二から付き合いだして半年。

この間まで超ラブラブでエッチもいっぱいした。

なのに・・・ここ一週間前から様子がおかしい。

今もせっかく私が遊びに来ているのに携帯ばかりしている。

「ねえ、隆二いつまでメールしてんの？」

「ごめん、もうちょっと」

「いったい誰とメールしてんのよっ」

私は隆二から携帯取りあげた。

携帯には知らない女の子の名前・・・

内容は・・・『こないだ良かった』

「ちょっと隆二これどういう事？」

私は隆二に問い質した。

「あーごめん、俺さこの子と上手くいきそうなんだよね」

隆二開き直った。

「じゃあ、私とはどうすんのよっ？」

「えっと・・・」

「えっとじゃないでしょっ！どっちが好きなのよ」

「どっちも・・・」

ありえない！

ありえないでしょっ

どうして二人同時に好きになれんのよ？

「私は別れる・・・」

「え・・・？」

え、じゃないだろう。当然だろう。

「美樹、ごめん」

「やだ」

私は立ち上がり隆二の部屋を出た。

信じられない！

私は怒りで思わず部屋飛び出したけど・・・

急に独りだって思ったら悲しくなってきた。

私の目からポロポロ涙が溢れ、胸が苦しくなった。

なんでよ？

この間まであんなに好きって言ってたくせに。

なんでよ？

美樹だけだよって言ってあんなにエッチしたのに。

あれ全部ウソ？

私はダッシュで泣きながら家に帰った。

私は自分の部屋のベッドにダイブし、泣きじゃくった。

今起こっている現実が全く受け入れられなかった。

隆二・・・二股だったんだ。

私にしたように他のコにもしたのかと思ったら、胃の辺りがぐちゃぐちゃした感じになった。

隆二からメールがきた。

『ごめん、あっちと手を切るから。俺は美樹がやっぱり好きだから』

私は嬉しくなった。

だけど・・・

だけど・・・こんな裏切り、はいそうですかって許していいのだろうか？

隆二の事好きだけど・・・

別れたらもう二度と隆二と過ごせない。

でももう信用もできない。

他のコを抱いた身体を私は許す事ができるのだろうか？

気持ちが行ったり来たりして訳が分からなくなった。

私は隆二に返信しなかった。

翌日、学校で隆二に会った。

「美樹、返事くれなかったな」

「そう簡単に返事できない、考えさせて」

「分かった、待ってるよ」

その日から私は隆二と隆二と距離を置いた。

教室で隆二を遠くから見ていた。

楽しそうにいつものメンバーと笑ってる。

私は隆二の笑顔が好きだ。

でも今は私を裏切ったのに、そうやって何もなかったように笑ってられる隆二にムカついた。

あいつ反省してない？

放課後、いつもは隆二と帰っていたけど今日は友達の真奈美と帰った。

「隆二とケンカした？」

「ケンカじゃないよ、アイツ浮気した」

「浮気!?!たいしてイケメンでもないのにいい度胸してんじゃん」

真奈美はそう言った。

そうだよな、隆二ってば別にイケメンでもないし普通のごく普通の中の中の男だ。

なのになんで浮気？

よくよく考えたら隆二は意外とマメな男だ。

メールの返信も早いし、記念日も忘れない。

ちょっと時間が出来れば私との時間を作る。

結構口も達者で私を喜ばせることも上手だ。

だとしたら・・・

今後隆二と付き合ってもまた同じことされるかも・・・

「ねえ、真奈美だったらどうする？」

「えっ？浮気されたら？う～んそうだな、別れるかな？」

「そっか・・・」

「何悩んでるの？」

「隆二は謝ってやり直したいって言ってるんだよね」

「でもさ、浮気する男ってまたやるよ」

「やっぱり？」

「うん、そう思う」

真奈美は結構しっかり者のお姉さんタイプ。

物事もハッキリ言うドライな子だ。

「美樹なら、もっとかっこいい彼氏出来るよ。私達高校生だよ、わざわざ苦しむ恋愛しなくていいんじゃない？」

真奈美の言葉はかなり胸にキタ。

「そうだね」

私は真奈美に微笑んだ。



「ねえ、カラオケ行く？」

真奈美が誘ってくれた。

「あっそれいいかも」

「行こう！」

私達は駅前のカラオケボックスで歌いまくった。

なんかすごくスッキリした。

「真奈美、ありがとう！私決めた、隆二と別れる」

「うん、それがいいよ。寂しくなったら私がいるじゃん。私も今彼氏いないし」

「ふふふ、ありがとう！持つべきものは親友だね！」

私達は笑って歩いた。

私はその夜、隆二にメールした。

『さようなら、やっぱりこれ以上隆二とは付き合えない』

隆二はすぐに考え直してとか好きだとか何回もメールをよこした。

だけど私は返信しなかった。

『好きだ、好きだ、好きだ』のメールには涙が出た。

私も好きって返信しそうになった。

でもね、心を鬼にしたんだ。

隆二はきっと浮気相手にも言ってたんだよ。

私は同じ過ちを繰り返したくないから。

しばらくしたら件名に『最後のメール』って記した隆二からのメールがきた。

『ごめんね、ホント好きだった。楽しかった。でも俺も男だし女々しいのかわこ悪いから美樹の事諦める。じゃあな』

私は本当に別れたんだって実感して、泣きじゃくった。

隆二のところに戻れないんだと思ったら悲しくて辛くて苦しくて・・・

私ってこんなにも隆二の事が好きだったなんて思ってもみなかった。

翌日、学校で隆二に会った。

同じクラスって最悪。

隆二は私を無視した。

そして・・・隆二は笑ってた。

何事もなかったように笑ってた。

めちゃめちゃ惨めな気分になった。

いつの間にか私だけが好きだったんだってその時気付いた。

隆二の『好き』はきっと、私にとってのちょっとした『好き』なんだろう。

好きの重さ計れたらどんなにいいだろう。

寂しくて、悔しくて、でも好きなもどかしい気持ち・・・いつなくなるのかな？

泣き出しそうな気持ちになった。

その時...

「美樹、今日買い物行かない？」

真奈美が笑顔で話しかけてくれた。

「うん、行く」

私は頑張って笑顔で応えた。

放課後、真奈美と買い物しまくった。

新しい服を買って、ちょっとメイク道具も買った。

気分転換で楽しかった。

「美樹、笑ってるよ。美樹は笑顔が似合ってる」

「真奈美...」

「女の子はね、失恋する度にキレイになるんだって」

「え?...」

「この間読んだ本に書いてあった」

「本当？」

「うん、だから美樹ももっとキレイになるよ」

真奈美の優しさが嬉しくて...

「ありがとう！よし、今日買った服で今度の休み遊びに行こう」

「うん！」

私、今笑ってる。

あれから...半年

私はどうしてるかって？

元気です！

何度も泣いた夜や寂しくて辛い日乗り越え...

新しい恋の予感、今感じてるの。

バイト先で知り合った一つ上の柿沢さん。

昨日デートに誘われちゃった。

私好みの優しい雰囲気です。久しぶりにちょっとドキドキしてる。

真奈美も彼氏出来たし、私達の友情も恋も...勉強も全力投球で楽しんでいます！

一度しかない青春グズグズしてたら終わっちゃう。

私は後ろを振り向かないで前を向いて歩きたい。

だから...時には辛い選択もする。

でもそれは自分の為だから...

隆二の事...好きだったけど、私の選択、間違っていないって今なら思えるよ。

バイバイ隆二。

君は私の青春の一ページに入れてあげる。

end

2013.3月頃作成

小悪魔なハニー

女子高生に恋した男のお話

アクシデントで出会ったギャルな女子高生は

なんと友達の妹だった！



朝の通勤ラッシュは尋常じゃない。

赤の他人がどうしてこんなにも密着しなければならないのだろう。

俺はあの日、前の晩の都合の良い恋に夢中でかなり慌てて家を飛び出した。

ドアが開くとどっと人の波に押され、反対側のドア付近まで追いやられた。

すると、俺の目の前に女子高生というブランドで身を固めた少女がいた。

このまま女子高生にくっつけば痴漢と間違えられるかも。

咄嗟の判断で両手をドアに付き、女子高生との密着を防いだ。



女子高生は明るい髪色に朝からバッチリ決めた、縦巻きの髪だ。

隙間がない程の黒いつけまつげに、白い陶器のような頬で艶々した唇をキュッと閉じ俯いていた。

その女子高生が肩を揺らしてクスクスと笑っている。

なんだ？コイツ...

するとチラッと上目遣いで俺を見て、にやついた顔で俺の股間を指差した。

俺も視線を落とし、自分のを見た。

「・・・・・・・・」

開いてる...

マジかよ!?

なんという失態！

神様穴があったら入りたい！

女子高生は俺の焦った顔を見て更にクスクスと笑ってやがる。

今すぐファスナーを上げたいが、手を離すとこの女子高生に密着してしまう。

ファスナーを開けたまま密着したら、余計変態だろ。

どうする？どうする？俺！

焦りまくっている俺を女子高生は見て、嘲笑気味の顔で彼女の胃の辺りの前にある俺の股間にそっと手を伸ばした。

おおっ!?何すんだ!?

すると、女子高生はそっとファスナーを上げてくれた。

上げ終わると軽く股間を叩いた。

「・・・っ」

女子高生は悪戯な顔でニッと笑った。

「どうも...」

かなり小さくお礼を言った。

女子高生はまたニコッと笑った。

ヤバい...なんか今胸がギュッとした。

ファスナー上げられて股間を叩かれ、満員電車で女子高生に落ちるのは完全に変態だ。

俺は慌てて目を逸らし、違う事を考えた。

ムカつく課長の顔とか。

次の駅はこちら側のドアが開いた。

女子高生も俺も一旦降りた。

電車から人並みが入れ替わる。

女子高生と俺は離れた。

そして...彼女がどこで降りたかも分からなかった。

帰宅の電車で揺られ、吊革に掴まっていた。

トントン。

誰かに肩を叩かれた。

誰だ？

振り返るとあの女子高生だった。

顔は女子高生だが私服を着ていて気づくまで数秒かかった。

「あ...」

女子高生はこれまた胸の谷間を見せたTシャツに、ショートパンツにナマ足でどんな男だってそられる出で立ちだ。

俺が親なら絶対こんな格好させねえ。

とか思いながら、上から胸の谷間に釘付けだ。

女子高生は見透かしたようにニヤリと笑ったから、慌てて目を反らした。

「ねえ、私の事覚えてない？」

女子高生が話しかけてきた。

「覚えてるよ、この間はどうも」

目を合わせず答えた。

「違う、奏太」

「え!？」

名前を呼ばれて驚いた。

なんで10才くらい離れたヤツに名前と呼ばれたのかサッパリ分からず、頭にクエスションマークだらけだ。

「あ～あ、やっぱ覚えてないや。私はすぐに気づいたのに…」

誰だ？誰だ？

俺は頭の中の記憶を辿る。

「奏太、私を抱いたじゃない」

小さい声で耳元で囁かれ、ぶっ飛んだ。

抱いてない！

俺は女子高生とはやっていない。

何かの間違いだ。

焦る俺を女子高生はとうとう堪えきれずクスクス笑い出した。

「お姫様抱っこでね」

お姫様抱っこ!?

お姫様抱っこのヒントで俺はまた記憶の糸を手繰り寄せる。

「あ・・・・」

記憶の棚から思い当たる場面がフラッシュバックした。

.....

「どうした？百花？」

「転んじゃった」

「痛そうだな」

「歩けない」

「背負ってやるよ、家まで連れて行ってやる」

「ヤダ、スカートだもん。抱っこにして」

「しょうがねえな」

.....

「百花？」

「正解！」

百花はニコッと満遍の笑みを見せた。

その笑顔は少女の頃の面影があった。

百花は高校の友達だった、裕太郎の妹だ。

年の離れた妹を裕太郎はよく可愛がり、俺が遊びに行くとよく部屋に入ってきて俺達にじゃれついていた。

「百花、変わり過ぎだろ」

「そう？奏太は変わってないね。そそっかしいところ」

そう言って、俺の股間をチラッと見て、クスッと笑った。

この小娘が！

まだ引っ張るか...

話題変えよう。

「裕太郎は元気？」

「結婚して、子供いる。女の子。今一歳」

「へえ、アイツがねえ」

俺より全然奥手だった裕太郎が親父になったなんて信じがたい。

「奏太は？」

「あ、俺は独身」

「彼女は？」

「いないな」

「へえ～いそうに見えた」

俺は苦笑いした。



俺は特定の彼女は作らない。

真剣になれば別れる時は辛くなるし、好かれれば束縛されるのがウザくなる。

正直、面倒くさいのだ。

不特定多数の適当に都合のいい後腐れのない程度の関係で満足していた。

「ねえ、お腹空いちゃった。奏太なんか奢ってよ」

「なんで、俺が...」

「ファスナー上げてやったじゃん」

「.....」

「決まりだ」

俺が百花に奢るのは決まりらしい。

俺達と一緒に電車を降りた。

「何食べてえんだよ？」

「ガ〇トのチーズインハンバーグ！」

はあ!?

奢ってもらうのにファミレスのハンバーグかよ。

全くお子様だな。

とか思いつつ、百花のお望み通り俺の家の傍のガ〇トに向かった。

只今目の前で、百花が無邪気にチーズインハンバーグを食べている最中。

こうして見ていると当時の面影はしっかりあった。

可愛かったよな・・・あの頃は

「ん？」

俺の視線に気づいてハンバーグを頬張ったままこっちを見た。

慌てて視線を下し自分のパスタを食べる。

ああっなんか調子狂うな。

女子高生と食事なんて、なんか視線が痛い気もする。

早く食べて別れよう。

無意識にパスタを素早く掻きこんでいた。

食事が済んで、外に出る。

「はあ、満足満足！ご馳走様」

百花はニッコリ笑って俺の腕に絡み付いてきた。

「ちょっ...離れろよ」

「いいじゃん！早く行こっ」

「行こうってどこに？」

「奏太の家に決まってんじゃない」

「はあ??」

当たり前のように言われ、マジで驚いた。

「無理無理！俺んちは女禁止」

「なんで？」

「なんでって...」

「ああ、エッチな本がいっぱい？」

「ちゃうわっ！」

「じゃあ、いいじゃん。私今日暇なんだもん」

「俺は暇じゃねえつうのっ」

ちょっと強く言ってしまったら・・・

凄く寂しそうな顔して俺の腕からスルリと離れた。



ああっ...もうっ

「ちょっとだけだぞ...」

仕方なしにそう言うと、百花はパッと表情が明るくなった。

「やった！」

そして再び俺の腕に絡みつく。

.....だから胸が当たるんだっつーの！

めっちゃ弾力のある膨らみが俺の二の腕にまとわり付いた。

俺の理性めっちゃ心配.....

と思いながらアパートまで百花と歩いた。

百花は無邪気にご機嫌だった。

蒸し暑い締め切った俺のアパートにたどり着くと、

開口一番

「うひゃあ～男くさっ」

と百花は鼻を摘んだ。

「悪かったな、嫌なら帰ってもいいんだぞ」

と言いながらもとりあえず窓を全開にした。

で、エアコンも同時に付ける。

百花は遠慮なしにベッドに腰掛けた。

いつものように無意識に着替えようと

ネクタイを横に振り緩め、外すといつもの癖で、シャツも脱ごうとボタンを外した。

「えっ？奏太いきなりですか？」

百花はクスクス笑いながら言った。

「あっ、わりい、いつもの癖で脱いじまった。ってか女子高生は食わないから安心しろ」

そう言い返すと百花は膨れた顔をして

「バカにしないでよ！私もう大人だよ！処女じゃないしっ」

とムキになっている。

で、なんか俺もムカついた。

シャツを脱ぎ捨て百花に近づいた。

「ああ、そうか・・・百花はあんなに可愛かったのにすっかりビッチか？ そうだよな、平気で男の部屋にノコノコ付いてきて、誰でもいいからやってくれってか？」

百花の顔が一気に強張った。

「んじゃ、ヤッってやろうか？ そんなにヤリてえならお付き合いするぜ。全く感情がないエッチ教えてやるよ」

百花をベッドに押し倒し、さっき開け窓をピシャリと閉めた。

すると百花が今にも泣き出しそうな顔をしている。

「どうした？ その目的なんだろ？ 早く脱げよ俺は脱がすのめんどうだ」

優しくない俺は追い討ちをかけた。

「奏太は変わったね。もう優しくない・・・」

「変わっちゃいないよ・・・変わったのは百花の方だ。残念だよ・・・」

すると百花思い切り俺を突き飛ばした。



「帰るっ」

「ああ、帰れ」

俺は百花を見ずに言い放つ。

百花は玄関で靴を履きドアを開けた。

そして、振り返ってこう言った。

「ずっと好きだったのに、私の初恋だったのに、会えて嬉しかったのに、奏太最低！マジ最低！！」

バタンっと大きな音を立ててドアは閉まった。

「・・・・・・・・・・」

俺、バカみてえ・・・・・・・・

自己嫌悪に陥る。

ああ・・・ホントは俺の方が動揺してたんだ。

百花が女に見えて悔しかった。

百花に見透かされてるみたいで頭にきた。

大人気ないな・・・

俺は初恋相手か・・・

気づかなかった。

そんな百花の気持ちを俺は・・・

ごめんな・・・百花。

それから百花と会うことはなかった。

多分夏休みになったんだろう。

俺は相変わらずだ。

満員電車で揺られ会社と家の往復。

都合の良いセフレとたまに息を抜き、特に変わった事はない。

時折、女子高生を見かけると百花を思い出し、少し胸が痛い。

それだけだ。

きつとこんな気持ちそのうち薄れる。

そして再び百花は俺の記憶から消えてゆく。

そう思っていたが・・・ある日・・・

休日の日だった。

前日、飲まず食わずで残業し、そのまま帰宅して爆睡し、昼前に猛烈に腹が減って目が覚めた。

そういう時に限って冷蔵庫は空っぽだ。

思わず近くのファミレス・・・そう百花と行ったガ〇トに入った。

一番最初に目に入った、チーズインハンバーグを注文し、食事がくるのを待っていると・・・

「おねえちゃん、可愛いねえ」

「やめてくださいっ」

後ろのテーブル席から思い切り聞こえて振り返ると、昼間から酔ったオヤジがウエイトレスの女の子にちょっかいを出している。

ウエイトレスの女の子は真っ黒い髪をツインテールにした、ウブそうな・・・

あれ？

「百花??」

思わず声になってしまった。

「奏太！」

百花は俺の顔を見るなり安心しきったように、俺のテーブルに逃げてきた。

「なに、バイトしてるのか？雰囲気変わって気づかなかった」

「うん！バイトだからイメチェンしたんだ！」

「なかなか似合ってるじゃん」

百花はちょっと照れながらも、

「でしょっ」

と悪戯に微笑んだ。

「奏太がここにくるなんて珍しいね」

「まあな・・・ってか大丈夫か？」

「うん、たまにいるけどね。バイトだし・・・今はラッキー！逃げられた」

そう言って舌をペロリと出し悪戯っぽく笑う顔は間違いなく百花だ。

だけどなんだかちょっとしっかりして見えた。

「頑張れよ」

「うん、ありがとう」

百花はトレイを胸に抱えて厨房に戻って行った。

それから・・・

百花の頑張る姿を見たくなくて

つつい店に足を運んでいた。

百花が真面目に働いている姿を見るとなんとなく元気を貰って自分もやる気になった。

もちろん、忙しそうにしているから、会話は挨拶程度だったが・・・

仕事帰りにその日も夕食を取りに店に行った。

食後のドリンクを取りにドリンクバーでアイスコーヒーを注いでいる時だ。

百花が何気に近づいてきた。

「もうすぐバイト終わるよ」

「そうか・・・」

「うん・・・」

「待ってるよ」

俺は無意識に言っていた。

百花がはにかみながら微笑んだ。

めっちゃ可愛くて胸が跳ね、ウツカリグラスからアイスコーヒーは溢れてしまった。

俺はこの時気づいた。

百花が好きなんだと自覚した。

店の裏で百花が出てくるのを待った。

その間ずっと自分の気持ちと向き合ってみた。

相手は女子高生。

しかも友達の子。

俺が女子高生にマジ惚れ？

と正直どこか悔しいような後ろめたい部分もあったが・・・

認めるよ。

俺は百花が好きだ。

自分に素直になろう。

真夏の星空を見つめ自分の気持ちを認めた。

「お待たせ～！」

百花が笑顔で裏口から出てきた。

「お疲れさん」

俺も笑顔で出迎えた。

たまには真面目に恋でもするか・・・

相手は女子高生。

手は抜けない。

「どこ行く？」

「奏太んち！」

「バーカ、襲うぞ！」

「はははは....」

無邪気に笑う百花は俺のハートを落とした小悪魔だ。

完

2013.3月頃作成

2014.615日完結



## キュートな恋の短編集

<http://p.booklog.jp/book/85869>

著者：キミイ

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/kimiynoheya/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/85869>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/85869>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ